【奨励賞】

十人十色

立命館守山中学校２年　杉浦　蒼唯

それは、小学三年生に進級した時のことでした。小学二年生から同じクラスだった友達が最初の言葉をつまらせる、ということがよくありました。なにせ、その頃の私は八歳、九歳という歳だったので「なぜ言葉をつまらせるのだろう？」と不思議に思っていました。

吃音症。それは話し言葉がなめらかにでない発達障がいの一つです。
吃音は百人に一人がなると言われていて、全国には約百二〇万人の人々が持っていると言われています。

私が吃音症を知ったのはつい最近のことでした。ＹｏｕＴｕｂｅを見ているとあるニュースの動画が目にとまりました。吃音を持った女性がインタビューを受けている映像と共に「注文に時間がかかるカフェ」というカフェのことについて話している動画です。彼女のインタビューにはこのような言葉がありました。「人と話すことが大好きなので接客業などの人と関わる仕事がしたかった。」こんな思いを持った吃音症の人達は他にもいるはず。というので始まったのが、「注文に時間がかかるカフェ」です。実際にカフェのウェブサイトを見てみると、「時間がたまに止まります。でも気にしないで。正確には時間が勝手に止まってしまうのです。」と書かれています。時間が勝手に止まる。確かに吃音症の人々はなりたくて吃音になっているわけでもなく、話したいことが話せないのは辛い。勝手に時間が止まるというのはそれほど本人達にとって苦痛だと思いました。私達は、吃音症になったことはないけれど、注文に時間がかかるカフェの店員や全国の百二〇万人の人々は「吃音と自分自身を受けいれてほしい。認めてほしい。」そう思っているのではないでしょうか。

さきほどの女性の話に戻りますが、インタビューでこんなことも言っていました。「音読の授業が地獄でしかなかった。自分の番になると、真似したり、吃音を知らない人達が暴言をはいてきたりした。」障がいを持っていることは、その本人が悪いなんてことはないし、みんなが一人一人の個性を認めていけば吃音症だけでなく差別がなくなると思います。

みなさんもよく聞いたことがあるかもしれませんが、これからは「多様性を認め合う時代」であると私は考えます。でも、ひとまとまりに「多様性」と言われても具体的には難しいですよね。吃音症や他の障がいが普通ではない、自分とは関係がないから傷つけてもいい、自分さえよければ他はどうだっていいという考えではいつまでたっても差別はなくなりません。今、作文を読んでいる中でも自分とは無関係だから話を聞かない。つまり他人事で受け入れてしまってはいけないと思います。人の気持ちを理解しようとすることは大切なこと

です。ですが、障がいを持った人々は私たちと同じ一つの命を持っていて、日常を一生懸命に生きています。障がい者はいわゆるチャレンジャーです。ですが、差別をなくし、自分ではない相手を認めることができれば全国のすべての人がチャレンジャーになることができるのではないでしょうか。

まずは相手の気持ちを考えることから初めてみるといいのではないかと私は考えました。他人事ではなく自分事と、とらえることでチャレンジャーの見方が一気に変わると思います。気持ち一つで発言がすごく変わります。相手の気持ちを考えず、ストレートに発してしまった言葉が相手にとっては違うとらえ方になってしまうこともあれば、きつく聞こえてしまうこともあります。さきほど私は「同じ一つの命」と言いましたが「命」という言葉でまとめているだけで、聞こえ方も感じ方もひとそれぞれです。色も形も違います。同じ命なんてこの世界には存在しません。違う命だからこそ相手を知ろうとし、相手を思いやることができるのです。

「普通」なんて概念はいりません。なぜなら私達は十人十色の命があるのだから。